

平成 2 8 年 度 自 己 評 価 表

中長期目標 (学校ビジョン)		今年度の重点目標		1 自主自律の心の育成及び生活習慣の確立 2 職業教育の課題の検討とさらなる充実 3 人とのよい関係性や社会性を育む指導 4 教職員の専門性、授業力、対応力の向上 5 法令を遵守し、説明責任を果たせる学校			
年 度 当 初				評 価 結 果 (最終)			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 自主自律の心の育成及び生活習慣の確立	学級・学年の連携による生活指導、保健指導の充実(○学年部、指導部、保健部)	○社会人としての基本的な生活習慣の意識が低く確立されていない生徒がいる。 あいさつ：挨拶が元気よくできている生徒と挨拶ができない生徒がいる。 時間厳守：遅刻をする生徒は減ってきている。 身だしなみ：学習時間の始まりに点検をし学習を始めているがくずれがちである。	○基本的な生活習慣(あいさつ・時間厳守・身だしなみ)を身につけることができる。	○基本的な生活習慣の大切さ(3項目)を学部集会、学年集会等で伝える。 ○挨拶・時間厳守・身だしなみ標語募集など、生徒の主体性を促す取組を工夫する。 ○授業前に学習ルールの徹底を図る(基本的な生活習慣3項目) ○あいさつ日を設定し(2の付く日)玄関で生徒会や職員で挨拶で生徒を迎える。 ○月初めの1日は身だしなみ点検日とする。 ○寄宿舎・家庭、学校と連携を図る。	○あいさつについては、学校全体での標語づくりや朝の「ここにこデー」での声かけ運動等で積極的に取り組んだ。 ○生徒の実態から、できていない点を目標化して取り組んだ学年もあった。 ○目標達成のための方策について継続して取り組めなかったものもあった。 ○挨拶・時間厳守・身だしなみ等についてできていない生徒は限られおり、それらの生徒にどう指導するかが課題である。 ○生徒の学校生活アンケートでは、挨拶や言葉遣いは70%、服装など学校のきまりは89%の生徒が良いと評価している。	C	○学年での課題を目標化して生徒主体で取り組める活動にしていく。 ○各授業等生徒と対面する場面で基本的なことを徹底する。 ○全職員の連携を徹底する。
	教育相談活動の充実(○支援部、学年部)	○昼休憩の支援部員による相談活動、個別の面談、スクールカウンセラーによる相談活動を行っている。	○多くの生徒が多くの教職員に相談等ができるようになってきている。 ○年間の相談者数が昨年度の実践に比べて増えている。	○従前の相談活動に加えて、多くの教職員による(支援部、級外の教職員、養護教諭、スクールカウンセラー)相談活動を実施する。	○支援部による昼休憩の相談室開放、級外の教員による昼休憩の相談週間、スクールカウンセラーによる相談活動、保健室での相談活動等により、多くの生徒が多くの教職員に相談できるようになってきた。 ○スクールカウンセラーの相談者数をはじめ、年間の相談者数は昨年度に比べて増加している。	B	○級外の教員による相談週間の回数を増やし、自分から相談することができる生徒を増やす。
	ウェルカム琴の浦、入学者説明会の効果的な実施(○支援部、総務部)	○入学予定者が入学後の生活に見通しを持つことができるように、校内見学、本校のきまりや学習のルール等を授業として知らせている。	○参加した入学予定者が本校のルールを理解し、入学後の生活に見通しをもつことができている。	○入学前の不安を軽減し、入学後の生活に見通しを持てるように内容や方策を工夫する。	○体験入学、生徒対象説明会では、学校見学、本校のきまりやルール説明等をし、本校の生活を具体的に知らせることができた。 ○ウェルカム琴の浦、入学者説明会はこれからの実施であるが、入学後の生活に見通しを持てるよう、内容の工夫を検討している。	B	○新入生の様子から取組の検証を行い、今後の内容等について検討をする。
	学校と寄宿舎の連携強化(○学年部、寮務部)	○学校と寄宿舎間において十分な連携が取れていない部分がある。	○生徒に指導目標の共通理解や情報共有がスムーズにでき、学校と寄宿舎とで役割分担しながら指導ができていく。	○生徒情報の会や職員朝礼等で情報共有に努める。 ○必要に応じてケース会や担当者の会を持ち、指導や対応について共通理解を図る。 ○個人懇談前に、目標や評価の確認会を行う。 ○個人懇談は、計画的に寄宿舎指導員も参加する。	○事前に学年主任・担任と寄宿舎指導員が連携を取れるようになってきている。 ○事案があった時にその都度情報を共有し、連携を取り合うことができた。 ○個人懇談における寄宿舎の位置付けを明確にし、個別の指導計画の目標の達成に向けての共同の取組ができた。	C	○今年度改善できつつある事項をさらに実践により積み上げる。
	マイスター制度の検証(寮務部)	○昨年度末のゴールドマイスター取得者48%、シルバーマイスター以上取得者94%だった。 ○シルバーマイスターで満足している舎生もいる。	○全員が自己管理能力を高めて、ゴールドマイスターを60%以上、シルバーマイスター以上を100%の舎生が取得している。(途中入舎を除く)	○舎生がより上のマイスターを目指そうとする制度への見直しを含めた検討をする。 ○マイスター制度に関するアンケートを行い、検討するための資料とする。	○舎生へのアンケートを実施し、その結果をもとに、ゴールドマイスターの許可要件の変更とマイスター停止に伴う降格制度を新設した。 ○降格制度を新設したことによって、ブロンズに降格した舎生が1名出たため、ゴールド72%、シルバー以上98%の取得率となった。	B	○ゴールドマイスターに達した舎生が意欲を持ち続けるための指導支援を工夫する。
2 職業教育の課題の検討とさらなる充実	学科・コース選択のプロセスの検討(学科部)	○生徒の中には現在のコース決定に至る年次の絞り込みが適さない者がいる。 ○資格取得を目指す場合には、早い時期にコースの絞り込みをした方が良い場合がある。	○学習内容と目指す資格について検討し、それにふさわしいコース選択の時期を決定する。 ○各コースの内容や現在の類型、コース選択のあり方を検証、検討する。必要あれば学科・コース選択方法を変更する。	○類型や2年次の選択のあり方について検討する。(年間3~4回) ○取得を目指す資格の洗い出しをする。 ○資格取得に必要な学習時間を検討する。	○生徒に適したコース選択が可能となるように、2年次の学科枠を解いて選択する方法に変更した。 ○生徒の選択に関する協議を多くの教職員で実施するようにした。 ○サービスコース内の介護学習について、資格取得に必要な時間数が確保できる学習形態を見出し、次年度試験的に実施することにした。 ○指導体制を充実させるために、指導者資格取得のための予算を設け、次年度に複数の指導資格者を確保するための研修を受講するようにした。	B	○サービスコースの在り方を検討する。(資格取得希望者と他生徒の学習方法すり合わせ) ○新しい選択方法を検証する。 ○介護資格取得のための指導体制の在り方を検討する。
	成果発表会の開催(学科部)	○昨年度のプレ大会を開催した。生徒は自分の3年間の成長について自分の言葉で堂々と発表することができた。	○3年生が、専門教科の学習成果や自分の成長を達成感を持って堂々と発表している。 ○1、2年生は3年生の発表を見て、自分の目指す姿のイメージを持っている。	○発表会にふさわしい態度を普段の学習の中で指導を行う。(あいさつ含む) ○各コースの取り組みについて定期的に確認をする。(学科会等)	○発表のテーマを生徒主体で決定し、その発表のための練習や研究を本番に向けて取り組んでいる。 ○校外の施設を借り上げ、地域の方や保護者・関係者にも案内をすることで、大勢の前で緊張感をもって発表できるための準備をしている。 ○各コースに定期的に声掛けや進捗状況を尋ねることで、発表に対する機運を高めていった。	B	○毎年、借り上げできる施設の確保、生徒の輸送方法の確保、この2点について検討する必要がある。
	卒業生を招聘したミニセミナー開催(進路部)	○今春、第1期生が卒業したところであり、これまで身近な人から体験談を聞くことはなかった。	○卒業生を招聘したミニセミナーを延べ3回開催している。 ○卒業生の体験談が在校生の進路学習に役立っている。	○人選を早めに行い、予め話す内容について打合せを綿密に行う。	○3回のうち2回は予定どおり実施できた(1回は雪のため中止)。 ○今年度は少人数で話を聞くようにしたことで、質問もしやすかったように思う。	B	○継続実施する。

様式2

	定着支援の実施と学習指導へのフィードバック（進路部）	○昨年10月に定着支援コーディネーターが配置となり、就職先への移行支援を積極的に行った。 ○昨年度は、一期生の進路先決定に至る取り組みを学習指導にフィードバックするための情報共有会を行った。	○定着支援が適切に行われ、卒業生の就職先での就労が定着している。 ○定着支援の現状や卒業生の課題が教職員に周知されている。	○定着訪問数の目安を決め、それを基にスケジュールを組む。 ○定着支援の情報提供の会を定期的実施する。	○定着支援については、計画的に就職先等へ訪問し、支援することができている。 ○定期的に職員へ情報提供することができている。 ○在校生へ還元すべき内容を、教職員へ示すことは十分にはできていない。	B	○在校生の指導でも考えて欲しいことなど口頭で伝える場を検討する。
3 人とのよい関係性や社会性を育む指導	自治活動（生徒会活動等）・部活動の活性化（指導部）	○年間を通じて、生徒が活躍する場を確保することができつつある。 ○計画的に活動し、各種大会やイベントに参加している。	○学校行事や委員会活動で生徒が主体的に取り組めるようにする。 ○生徒自らが発想し、自主的な活動ができるようになる。	○行事や委員会の活動の見通しが持てる環境作りや支援をする。 ○生徒一人一人の役割を明確化する。 ○部活動では、上級生がリーダー性を発揮できるような練習メニューを作成する。	○学校行事や各委員会活動では、生徒に見通しを持たせながら準備を進めた。その結果、生徒たちは上級生を中心に自分の役割を意識して取り組むことができた。 ○部活動では、各部とも上級生が最初に動いたり全体に声かけをするなどし、下級生の模範となるように活動している。また、部日誌をつけることで目標の達成の振り返りに取り組んだ。	A B	○委員会活動がさらに充実できるように、内容や方法について再考する。 ○部日誌を上級生が記録することを継続し、自主的な運営意識を高める。
	計画的な主権者教育の実施（学年部）	○これまで社会科担当や学級担任がそれぞれに主権者教育を行ってきた。 ○本年度から在学生の中に選挙権のある者がある。	○選挙のルールを知り、自らが政治について考えたり、主体的に選挙に参加しようしたりする生徒が育っている。	○生徒会選挙の機会を捉えて実践的な指導を行う。 ○琴浦町選挙管理委員会等、関係機関の出前講座を計画的に活用する。 ○生徒会・社会科・特別活動の担当で学習内容の共通理解する。 ○年間指導計画の作成に取り組むとともに学習教材の見える化を行う。	○関係機関の出前講座を計画的に活用し、見通しが持てるようになった。 ○社会科や生徒会・体育委員会等でも積極的に自治活動が進められた。 ○社会科、特別活動など関係する教科等の年間指導計画の見直しを行った。	B	○先進的な委員会・部活を紹介し、学校リーダーを育てる意味で教員主導ではなく生徒主導を意識した活動を進める。
	琴の浦チューター制度を中心としたより良い人間関係、社会性を育む指導（学年部）	○入学時のオリエンテーションで2年生が1年生に学校生活を教えるチューター制を実施している。他にも上級生が下級生に関わる機会を作るよう取り組んでいるが、計画的な取組にはなっていない。	○下級生が上級生から学ぶ喜びを感じている。 ○上級生が下級生に教える事を通じて喜びや役立ち感を感じている。	○異学年の人間関係づくりの場を設定する。（全校レク・実習報告会・修学旅行報告会・成果発表会等） ○上級生が下級生に適切な情報伝達したり助言をしたりする仕組みや機会を意図的に設定する。（専門教科・特別活動等）	○チューター制度の伝統が引き継がれ定着してきた。 ○専門教科で1年と3年が金曜日の4～6時間目にチューターに取り組み、両者にとって有効な取組になった。 ○関わる場面が増えたので上級生が下級生に教える喜びを感じる機会が増えた。	B	○チューター制の取組を整理し、共通理解を図る。
4 卒業生の育ちの検証と学校教育の見直し	「琴の浦教育検証プロジェクト」の開催（総務部）	○第1期生が卒業し、社会人としての生活をスタートさせている。定着支援コーディネーターの定期的な職場訪問により、就労後の状況を細かく把握しながらトラブル等に対応している。	○卒業生の育ちを社会人、職業人としての観点から検証し、本校教育の改善点を把握できている。	○「琴の浦教育検証プロジェクト」の会を定期開催する（年間4回程度） ○卒業生の就労状況、生活状況を把握し、在学中に指導すべきことという観点で、検討する。	○卒業生の就労状況、生活状況や在学中の課題等を資料にまとめ、在学中に一層強化して取り組む課題を検証することができた。 ○教職員全員で課題を共有したり、部会のメンバーで定期定期に検討会を開催し、計画的に検討を進めることができた。校内報告会の実施やホームページの掲載などを通して、その報告をすることができた。	B	○具体的取組を検討する。
5 教職員の専門性、授業力、対応力の向上	専門性向上（計画的な研修、自主学習会）（○学習部・支援部）	○障がい特性に対する指導や、キャリア教育に関する知識など、教職員の専門性の差が大きい。 ○昨年度、「琴の浦の専門性」について整理を始めたところである。	○琴の浦のキャリア教育について全職員が理解し説明できる。 ○「琴の浦の専門性」に関する多様な研修会（学習会）を実施し、教職員の専門性のベースができつつある。	○「職員研修会」や「自主学習会」を開催し、講義内容等を全職員で共有する。 ○初任者研修の一般研修に誰でも参加できるようにするなど、研修の機会を活用できる体制をつくる。	○新任者対象の教職員研修と人間関係に困り感のある生徒の指導等の2つの研修会を実施した。 ○生徒の指導・支援についても、事例検討会で指導を受けたことを積極的に指導や支援の取り入れる動きがあった。 ○他の研修会については、主幹教諭と教務主任による全員研修を3回実施した。 ○1月末までに、初任者研修に参加したり、資料をもとに自己研修をした教員は、延べ50名となった。 ○前期同様、参加できなかった研修内容について、講師に直接依頼して指導を受けた教員もあった。	B	○今年度同様悉皆研修として実施し、教職員全員のレベルアップをしていく。初任者研修に自主的に参加できる方法は継続していく。 ○年度当初に年間研修計画提案し、悉皆研修として実施する。
	授業力向上（一人一授業研（○学習部）	○昨年度は、授業担当者相互に授業を見合う参観期間を設定した。実施方法に課題があり、授業参観者は少なかった。	○一人一授業研を通して、個々に授業改善を図っている。	○自分の授業と向き合い課題を追求したり、参加者が互いに高め合い支え合えるような一人一授業研の取組を行う。	○一人一授業研では事後研は持たない場合は、参観シートにコメントを書いて渡し、また、直接話をするなどして指導力向上へ向けての取組を行った。 ○行事の関係もあり、事前に授業者が参観及び指導を依頼していたが、諸事情により参観者がなかったという報告も数名あった。	B	○参観者確保の方法、事後研の実施方法などを検討する必要がある。
	対応力向上（対応力研修）（○総務部・進路部）	様々な関係者への対応について、的確で好ましい対応をするためのノウハウを共通理解する機会がない。	○教職員の対応力が向上し（個別評価シートでチェック）、関係者からも良い評価を得ている。 ○対応力研修で学んだことが、日々の教育活動等の中で実践できている。	○対応力研修の実施（総務部2回、進路部1回） ○保護者、関係者に対して、教職員の対応について評価アンケートを実施する	○実態に合わせた事例を準備してグループ演習を行うなどして総務部主催の「対応力研修」3回と、進路部主催の「巡回の心得研修」を実施した。事後アンケートは実施しなかったが、参加者からは概ね好評であった。	A	○継続実施する。
6 法令を遵守し、説明責任を果たせる学校	コンプライアンス研修・学校改善（○総務部・事務部）	○コンプライアンスに関する情報提供、研修会実施、職場環境作りなどに取り組んでいるが、十分とは言えない。	○法令遵守や業務効率化に対する取組が進み、教職員の意識が深まっている。	○定期的なコンプライアンス研修、意識向上に関する取組を実施する。 ○学校カイゼン事業を活用し、業務効率化のための方策を検討し、実践する。	○県内学校等で起きた事例は職員朝礼や掲示板でその都度知らせ注意喚起した。職員会を利用したミニ研修を3回実施した。 ○「カイゼン研修」を実施し、業務の効率化について職員の意識改革を図った。教職員の意見を聞きながら学校ルールブックの作成を進めるなど計画どおり実施した。	A	○コンプライアンスに関することは継続実施する。 ○学校ルールブックの活用を進めることでさらなる業務改善をめざす。
	各種要綱・規定等の整備（○総務部、事務部）	○各種要綱、規定などについて見直し整備が必要である。	○必要な要綱・規定等が完備している。	○未整備の要綱・規定等の策定、従前の規定等の見直しや整理をする。	○規定やマニュアルの見直しを行い、追加・改訂を行った。 ○規定集のデータベースを整理し、分かりやすくした。 ○過去の簿冊を整理し、可能な限り集中管理した	A	○継続実施する。

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）